愛知教育大学研究報告，55（人文・社会科学編），pp. 1～8， March, 2006

郁達夫と孫荃・王映霞
—家・家族・愛の視点から—（上）

高橋みつる

Mitsuru TAKAHASHI

国語教育講座

1．はじめに

婚姻制度の過渡期における旧式結婚（包辦婚姻）の悲劇を語るとき，しばしば代表的な例として挙げられるのが，魯迅と第一夫人朱安・第二夫人許広平，そして郁達夫と第一夫人孫荃・第二夫人王映霞の関係である。「父母の命，媒酌の言」によって嫁いだものの，夫の愛を得られず，姑に仕えて終生を過ごした本妻と，教育を受けた新しい女性で，恋愛によって結ばれた実質上の妻という立場である。郁達夫の場合は，王映霞とも12年間の結婚生活の末，協議離婚している。その離婚に向かう夫婦の不和，より厳密に言えば，妻王映霞の夫に対する不信感の萌芽の背景には，本妻孫荃の存在があったと伝えられる。

結婚後の王映霞の社会的地位を「両頭大」という言葉で説明したのは，孫百剛[1]である。彼は，郁達夫と王映霞が出会ってから結婚するまでの一部始終を身近で見守った人物である。彼が示唆した「両頭大」とは，「妻と同等の地位にある妾」[2]を指す。この定義に従えば，魯迅の妻許広平も，形式上「両頭大」の一人であると言える。孫百剛は，「当時，故郷に初婚の妻がいて，外にもう一人妻がいるという状況は，社会的にも大変普遍的で，驚くほどのことではなかった」[3]と述べている。

「両頭大」は，愛情面でも生活面でも紛れもない歴とした妻でありながら，法的には妾であるという矛盾に満ちた立場に置かれた女性である。王映霞は，どのような経緯で「両頭大」という人生を歩むようになり，その間にどのような葛藤があったのであろうか。一方，本妻でありながら別の女性に夫を奪われ，寡婦同然の暮らしを余儀なくされた孫荃は，一体どのような思いで後半生を過ごしたのであろうか。また，結果的に「両頭大」という婚姻形態を選ばざるを得なかった郁達夫には，どのような事情・苦悩があったのであろうか。実は，婚姻問題の根底には，伝統的な家制度が深く関わっている。郁家，すなわち郁達夫の母親や兄弟たちは，王映霞との結婚をどのように受けとめていたのだろうか。そして姑である郁母と孫荃・王映霞２人の嫁との関係はどのようなものであったのだろうか。小稿では，孫荃・王映霞・郁達夫それぞれの思いを辿りながら，近代社会への移行期に孝と自由恋愛の狭間で苦しんだ多くの青年知識人が選択した「両頭大」という婚姻のあり方について考えていきたい。

なお，小稿で利用する文献的な状況について説明しておく。当事者３人の中で一番年少で最近まで健在であった王映霞が，2000年２月６日に92歳で亡くなった。王映霞は，郁達夫との結婚生活の思い出を綴った手記や自身の伝記などを多く残している[4]。それらの文献の中には，郁達夫との離婚騒動や再婚等をめぐる非難中傷への反論・弁明・自己正当化という意味合いの強いものもあり，一方的に彼女の記述のみに依拠することはできないが，12年間苦楽を共にした妻による証言であり，郁達夫研究の極めて貴重な資料であると言えよう。

それに対して，第一夫人孫荃には，残念ながら婚約時代に郁達夫と交わした漢詩以外，その生活や心情を語った直接の記録はない。しかし，孫荃の身近にいた親族が書き記した手記等によって，彼女の暮らしぶりや問わず語りに語られた郁達夫との思い出・胸中がある程度伝えられている。中でも，1993年に出版された蔣増福『郁達夫及其家族女性』[5]（浙江文芸出版社）は，著者の郁家に関する地元に密着した詳細な調査研究と共に，付録として親族の回想記も収録されており，孫荃を理解するためには不可欠の資料である。

郁達夫については，彼の文学史における重要性はもちろんのこと，王映霞との一大ロマンスや悲劇的な最期という波瀾万丈の生涯への関心も相まって，伝記小説と銘打った読み物風のものから広範な史料に基づいた信憑性の高いものまで，種々の伝記が上梓されている。郁達夫の手になる作品類と合わせて，こうした伝記類も考察の対象とする。

2．孫荃との婚約

郁達夫が孫荃と婚約したのは，1917年の夏，名古屋第八高等学校に学んでいた達夫が夏休みで帰国した

ときであった[6]。そのとき郁達夫は21歳，孫荃は1歳下の20歳であった。

先に，2人が婚約に至った経緯を，蔣増福の記述[7]に基づいて簡単にまとめておく。

孫荃は，1897年9月21日，浙江富陽宵井下台門村[8]の，商売や工場経営で裕福な読書人の家に生まれた。原名は蘭坡，荃は達夫が結婚前に贈った呼び名である。彼女は父の指導で初学者用の書物を読み，さらに家庭教師について『女四書』や『烈女伝』などを学んだ。聡明で勤勉だった彼女は，10歳頃には詩を吟唱し，父や長兄と詩歌で唱和することもできるようになっており，鄙には稀な才女と評判の娘であった。

郁家との縁談は，教養のある娘にふさわしい嫁ぎ先をさがしていた孫荃の父親が，経済力から見れば必ずしも釣り合いがとれるわけではなかったが，郁家の家柄とその子弟の優秀さ，そして留学中の三男達夫の将来性を見込んで望んだものであった[9]。元々孫家と郁家は古い親戚で，付き合いもあった。郁達夫の母親陸氏は，留学して博識経験豊富になった息子のことを慮って，息子の替わりに自分が品定めして，郁家の嫁の条件に合っているかどうかを確かめることにした。

ある初秋の午後，おばの付き添いで孫荃がはじめて富陽城内の郁家を訪れる。これが，孫荃と郁家，或いは後の嫁と姑としての長い家族関係の出発点だと言えよう。孫荃と陸氏は初対面でお互いにどのような印象を持ったのであろうか。

孫荃は，まず郁家の屋敷を目にして，一目で気に入った。それは，田舎にある自分の家よりずっと小さかったが，城内では大規模な方で，何よりも風光明媚な富春江畔にあり，花や木が植わり金魚の泳ぐ大甕まで置かれた庭園があった。屋敷に対する好感は，陸氏と対面したときの態度を，自然で親しみ深いものとした。

陳福亮『風雨茅蘆―郁達夫大伝』[10]（以下『風雨茅蘆』と略称）は，孫荃が姑と会った感想を次のように描写している。「彼女は郁家の2人の姑[11]に会って，彼女たちをとても優しく温かい人だと思った。」「辺鄙な貧しい片田舎に生まれた娘は，2人の温かい老婦人に好感を抱いた。…姑たちは大変気を遣って，椅子を勧めお茶を出し，親しく話をした。彼女は一目で自分の将来の姑が有能な女性であることがわかった。」

郁家の方も，その日無理矢理一晩泊めるほど孫荃を気に入ったようである。再び蔣増福の文章に戻ると，陸氏が受けた孫荃の印象は「温厚でまじめな田舎娘」[12]というものであった。清潔でぴったりしたプリント地のシャツとズボン，真っ黒なお下げ髪と明るくキラキラした大きな目，可憐な纏足と子宝に恵まれそうな豊満な臀部，おっとりした言葉遣いには，田舎者風の俗っぽさがなかった。

こうして，郁家の側も孫荃の容貌や性格，立ち居振る舞いに十分満足して，嫁として迎えることを決定し，留学以来はじめて帰国した郁達夫に速やかに結婚するよう求める。しかし，郁達夫は，学業を優先することを口実に結婚を拒否し，簡単な婚約式を行うことだけを承諾した。

この婚約の過程で大変興味深いのは，上記のように郁達夫の母親が孫荃を家に招待して，その人物を事前に確かめていることと，さらに郁達夫が婚約前に孫荃の家を訪ねて未来の花嫁と対面していることである。1918年4月27日の長兄郁曼陀宛書簡に「私は日本に発つ前日に，輿に乗って宵井に行き許嫁某と会いました。質素な身なりで容貌も今ひとつでしたが，話し方は上品で，取るべきところもあります」[13]とあるのは，このときの訪問のことである。

この訪問の詳細な状況はわからず，例えば郁達夫といっしょに行った人物も「一人の親友」[14]であったり「母親と仲人」[15]であったりと，伝記資料によって微妙に異なっている。ただ，母の言いつけで気が進まないままに出かけた郁達夫が，孫荃の奥ゆかしい話しぶりと優しい物腰，そして田舎の女子には珍しい文学の素養に驚き，ある種の親近感を抱くようになったことは確かなようである。上記の書簡の文面も，そのことを表している。その後2人の間には，手紙と詩詞が頻繁に交わされるようになる。

仲人の往来のみで，本人同士が顔を合わせることなく結婚が決まってしまうのが従来の伝統的な方法だとすると，郁達夫の場合は幾分なりとも先進的であったと言えるかもしれない。そして，結婚前に知り合ったことが，旧式結婚でありながら，2人の間に心と心が触れ合う何らかの感情を生じさせる貴重な契機を与えたとも言えよう。『風雨情囚―郁達夫的女性世界』は，次のように述べている。「孫家を出た郁達夫の胸中に，かすかな矛盾が生まれた。このような包辦婚姻に対して，受け入れてもよい，或いは喜んで受け入れたいという気持ちも一方で出てきた。また従って，彼の最初の結婚は旧式の包辦婚姻ではあったが，歩んだ先は魯迅や郭沫若とは多少異なり，彼らのように完全に形だけの夫婦で一切の感情がない，というのではなく，実際にある程度の感情が生まれ，後には真っ当に孫荃と子どもを育て比較的長期にわたる家庭生活を営んだのである。」[16]

ところで，孫荃は，一般には，白水紀子氏[17]が記しているように「旧式の女性」とされている。では，「旧式の女性」とはどのような女性を指すのであろうか。許慧琦[18]によれば，「『旧式女子』とは基本的には『新式女子』や『新女性』から逆照射された概念」で，教育を受けているかいないかが，両者を分ける一般的基準であった。そして「旧女性はより具体的には識字能力がなく纏足のままの女性を意味していた。」この具体的定義に照らせば，纏足ではあるが読み書きので

きる孫荃は，奇妙な言い方ではあるが半旧式女子（中国語ではない），ということになる。もちろん新女性が教育を受けていると言うとき，普通は近代的な新式の学校教育を意味するのであろう。孫荃の場合は，私塾もしくは家庭教師による古典教育であり，近代的な思想や学問に触れるような機会はなかったが，文字を使いこなして，詩詞を解し作れるというのは，極めて高い能力を有していると言えるだろう。郁達夫がいささかなりとも孫荃に惹かれるところがあったのも，既に述べたように，彼女の文学的素養の深さに好感を抱いたからであった。同じように親が決めた旧式結婚でも，魯迅や郭沫若が妻に対していかなる感情も起こらなかったのは，本人の思想・信条もあるが，朱安や張瓊華が纏足でほとんど読み書きができなかった，つまり典型的な旧式女性であったことも大いに関係しているのではなかろうか。

ちなみに，陳鶴琴「学生婚姻問題之研究」[19]は，1921年に男子学生の婚姻に対する意識を調査した報告である。自分の結婚に満足していない既婚者の回答では，その理由の1位が「(妻の) 教養が乏しい」となっている。具体的な回答例に，「不満な点は字を知らないことである。わたしが考えていることには興味をいだかず，話をしても，妻は内容を理解できない」などが見られる。逆に満足している点として，「家事のきりもりがうまい」をトップに「教養がある」も上位に位置している。その結果を踏まえて，陳鶴琴は「今の学生は目覚めた学生であり，新しい思想を受け入れている学生であるから，当然教養のない，いまだ目覚めていない女性に不満をいだく」と分析している。同時代・同世代・同身分の人々のこうした傾向は，旧式結婚に対する郁達夫と魯迅・郭沫若との態度の違いを説明するひとつの要素と考えられよう。

さて，婚約後の郁達夫と孫荃であるが，郁達夫は書簡と詩詞のやりとりを通じて孫荃への特別の思いを温めながら，他方でやはり母親が決めてしまったことが不満で，孫荃の田舎っぽさも気になった。そもそも，すぐに婚礼を挙げず婚約したのは，母親を悲しませたくないため，ひとまず引き延ばそうと考えてのことであった。孫荃への真情，母への孝心，自らの理想が交錯して，非常に複雑な心境にあったものと思われる。

郁達夫が早期の結婚を拒否した理由は，先に挙げた「包辦婚姻」への強い抵抗感，結婚相手への不満の他に，本人の問題，つまり学業の成就と経済面の不安があった。『風雨茅蘆』では，結婚を強要する母親に対して，郁達夫は次のような言葉を返している。

「母さんとおばあさんが年を取っている，それはわかっています。でも私はあなた方2人のお年寄りに私の替わりに妻を養ってもらうことはできません。申し訳が立ちません。それに私の勉強が終わっていない状況の下で，あなた方に心配をかけるわけにはいきません。」[20]「私は今まだ学業を終えていません。婚約の時，卒業してから結婚すると約束しました。私は蘭坡にも言いました，職に就いてから嫁に迎えると。何としても卒業してからでなくてはなりません。」[21]

学生時代の旧式結婚という点では，魯迅も郁達夫と同様に日本留学中に帰国して婚礼を挙げているし，郭沫若は結婚後に留学している。親の一番の願いが，息子に早く嫁をもらい跡取りの孫を抱くことであり，総じて結婚年齢が低かったこの時代には，在学中の「包辦婚姻」は珍しいことではなかった。しかし，実際には，それが大きな心理的負担となっていたようである。前に引いた「学生婚姻問題之研究」[22]で，既婚者に対して結婚後抱えている問題を訊いたところ，経済的困難，妻の無知，結婚生活による学業の妨げが上位に挙がっている。また，未婚者への結婚したい年齢の質問に対しても，「卒業後」「経済的独立後」と答えた者が多数を占めている。

1919年9月に，長兄の勧めに応じて外交官と高等文官の試験を受けたのも，科挙及第を最高の栄誉とする社会の伝統的価値観や外交官という職業を通して祖国に貢献したいという使命感と同時に，逃れられない結婚という事態を前に経済的問題を解決したいという現実的な思惑もあったであろう。結果はどちらも不合格であった。東京に到着後，孫荃に宛てた手紙[23]に「旅人は異郷にあり，一体いつ帰って娶ることが出来るであろうか」という件があり，添えた漢詩の署名が“白衣郎書”（無位無官の夫が記す）となっているのは，その挫折感の大きさと，結婚の前提となる経済的基盤が築けなかったことへの無念の思いが表れていると言えよう。

郁達夫が結婚を重荷に感じていたのとは対照的に，孫荃は「生きては郁家の人となり，死しては郁家の霊とならん」と固く決意し，しばしば郁家に行って郁母と祖母の世話をし，また達夫との通信の代筆者の役割も果たした。“未婚夫”達夫のいない富陽で，孫荃はすでに郁家の嫁として，かいがいしく2人の姑に孝養を尽くしていたのである。

3．孫荃との結婚

郁達夫が孫荃と正式に結婚したのは，婚約から3年後，1920年の夏休みであった。娘の婚期が遅れてしまうことを心配した孫家と母親から再三の催促を受けて，郁達夫はやむなく帰国するが，結婚式の種々の儀礼を省略して簡単な酒席を設けるだけという，花嫁には極めて残酷な条件を出した。それは封建的な婚姻習俗に対する彼の断固たる抵抗の証でもあったろうし，また，花嫁側がこのような厳しい条件を呑むまいと判断したからかもしれない。しかし，案に相違して孫荃の家はその条件をすべて受け入れた。郁雲『郁達夫伝』[24]は，その間の事情を語った長兄宛書信を引いて

いる。「結婚は元々私の望むところではありませんが，相手方から度々催促されて，仕方なく若干の条件を出しました。今孫伊清（孫荃の兄：原文の注）から手紙が来て，鳴り物や行列などの儀式を省略することを承諾するそうです。私の婚約者は本来私が選んだ者ではありませんが，離婚もできないので引き延ばしてきましたが，あちらに催促されて，私は今年の夏休みに帰国し，簡単な結婚式を終えるしかありません。」[25]

7月24日に結婚した2人は，富陽で短い新婚生活を過ごし，まもなく，郁達夫は，勉学を継続するために日本へ返って行った。

では，結婚後の郁達夫・孫荃・郁母の関係はどのようなものであったのか。まず，嫁孫荃が，郁家の姑や大姑からどのように見られていたか，という点から見ていきたい。

孫荃と郁母は，初対面の好印象以来，婚約時代もずっと良好な関係が続いていたようで，「若い嫁はとても従順で，姑・大姑から非常に気に入られていた」[26]と『風雨茅蘆』にある。郁家にとって嫁は孫荃だけではない。この時点で郁家には，三男達夫の妻孫荃の他に，長男曼陀の妻陳碧岑と次男養吾の妻李界如がいた。同書には，祖母がしばしば長男の嫁をほめ，次男の嫁の過ちをあれこれ咎めているのを郁達夫は耳にしたともある[27]。

長男の妻陳碧岑は，蔣増福「高風亮節老弥堅—郁達夫長嫂陳碧岑」によれば，1893年安徽に生まれ，1911年に郁曼陀と結婚している。幼時に両親を失い，勉強する機会に恵まれなかったが，結婚してから夫の指導により唐詩を学び，13年曼陀の司法視察に同行して，義弟達夫といっしょに日本に渡った。日本では東京錦秋高等女学校に入学し，また達夫と共に日本語の学習や漢詩修練に励んだ。14年曼陀が北京で奉職することになり，帰国。以後，32年に上海に転勤するまで，夫や子どもたちと共に北京に暮らしている[28]。彼女の一生は「伝統的な美徳を備えた良妻賢母の典型」[29]であったと評されている。郁達夫も，この兄嫁を母か実の姉のように慕い，父親代わりの厳格な長兄よりもむしろ近しい存在であったようである。長兄夫婦の長女で高名な画家である郁風によれば，「帰国後北京でつましい生活をしながら，父は給料を全部母に渡し，母から富陽の祖母と日本の三叔（達夫），北京の医学院の二叔（養吾）にそれぞれ送金された」[30]。このように，郁家の経済を支えていたのは長男夫婦であった。また，父がテロに倒れてから，「父の故郷は母の命の根源となり，1年置きに必ず帰って，帰ると必ず詩を作った」[31]と，長男の嫁と富陽，郁家の強く長いつながりを伝えている。このように見ると，長男の嫁が姑から信頼されていたことが充分想像される。しかし，このよく出来た嫁は，遠く北京に住んでいて，日常的に姑の世話をすることはできなかった。

次に，次男の嫁については，言及した資料がほとんどなく詳細はわからないが，「郁家世系表」[32]によると，夫養吾より2歳年上だったようである。『風雨茅蘆』の別の箇所[33]には，「二番目の息子は遠く北京医専にいて，嫁は親孝行とは言えなかった」「次男の嫁は姑の顔を立てなかった」といった記述もあり，富陽にはいたが性格が少しきつくて姑からはあまり好かれていない嫁であった可能性がある。そのことと関係があるかどうかはわからないが，養吾は数年後に若い妻（法律上は妾）を娶っている。

以上述べたような状況下では，実質上，孫荃が郁家にとって唯一のおとなしく，よく姑に仕える嫁だったことになる。

ところが，やがて姑がしばしば孫荃に厳しく当たるようになり，孫荃は姑の罵声におびえる辛い日々を過ごすようになる。母による妻の抑圧について，郁達夫が当時の作品の中で赤裸々に語っている。その頃の生活を描いた小説『蔦蘿行』[34]（1923年）には，帰郷した「私」が姑に虐待されて涙に暮れる妻の姿を目撃し，胸を痛めた「私」が，安慶法政専科学校への赴任に妻を伴うことを決意するという場面がある。また，散文『一個人在途上』（1926年）でも，「浙江の家で母と同居することができず，やむなく北京の当時『私』が身を寄せていた兄の家に引っ越してきた」[35]と述べられている。

良い嫁から不出来な嫁へ，良好な関係から虐待関係へ，その変化の原因は何だったのであろうか。

その主な原因は，孫荃自身の過失にあるのではなく，息子達夫にあった。留学中はおろか，帰国しても家に寄りつこうとしない息子。高齢の祖母も，女手一つで苦労して育てた母も，妻をも顧みない薄情者の息子。その憤懣がすべて，そばにいるか弱い嫁に向けられたのであった。『蔦蘿行』の妻は，しばしば「私」に手紙で，「家の祖母が会いたがっているから，夏休みや冬休みに時間があったら，祖母や母に会いに帰ってきてほしい」と頼んでいる。孫荃は，寂しさと苛立ちの入り交じる姑たちの気持ちも理解できたが，彼女には手紙で帰郷を促す以外にとれる方法はなかったであろう。

郁母が，息子の帰省をどれほど待ち望んでいたかを示すエピソードがある。孫荃が姪の郁風に語った上海時代の想い出である。「彼ら（郁達夫一家）が馬霍路に住んでいたとき，ひところおばあちゃん（私の祖母：郁風の祖母，つまり郁達夫の母親）も富陽から出てきて上海に滞在していた。ある日郭沫若が達夫を訪ねてきて，四川の実家から300元送ってきて帰って来いと言うが，迷っていると話した。すると何とおばあちゃんが面と向かって彼を叱りつけて，お母さんはきっと毎日首を長くして待っているのに，顔を見に帰らないのはいけないことだと言った。」[36]

郁達夫の不在に傷ついていたのは，母だけではない。妻の孫荃こそ，新婚以来，夫のいない侘びしさにひたすら耐えていたのである。現代ならば，逆に「息子が寂しい想いをさせてるわね」といたわりの言葉をかける物分かりの良い姑がいてもおかしくはないという気がするのだが，孝を最高の徳とする儒教社会の下では，息子も嫁もまず親に孝を尽くすことが求められるのであろう。息子が親を粗末にするのも，嫁の責任であり，同罪とみなされたのかもしれない。『風雨茅蘆』は，郁達夫の母親が，「元々達夫に優しい妻をさがし与えて，彼が家に帰りたい，富陽に帰りたいと思わせようと考えていた」[37]としている。息子を家に帰らせられないのは，嫁の力量不足・魅力不足だということであろうか。

このことと関連して，『感傷的行旅—郁達夫伝』[38]に興味深い場面がある。結婚後まもなく，郁達夫が日本へ戻るため家を出るとき，「姑は新婚の嫁が，夫が遠くへ旅立とうとしているのに，どうして一言の見送りの言葉も言わないのかと訝しく思い，心にかすかに不満の気持ちが生まれた。後の嫁と姑の不和は，この時にその原因が作られたのである」。

蔣増福によれば，孫荃は性格が「沈着・内向的・寡黙」[39]であり，『蔦蘿行』には，「女の色気はどうやって作るのかも知らず，流行の服はどうやって縫うのかも知らず，ただ従順の二文字を信奉することだけを，行動の規範としていた」[40]ともあり，確かに，夫の心をとらえるような気の利いたことを言える女性ではなかったと思われる。この時の様子は，『蔦蘿行』では次のように描写されている。「かわいそうにおまえ（妻）は翌朝私が乗船しようとするときまで，とうとう私のベッドの傍らに眠りに来ようともせず，話もしなかった。翌日夜が明けたばかりの頃，母が私を起こしに来て，船がもう鹿山の麓に来ているよと言った。この一別以来，またおまえとは遠く離れて2年が経った。」[41]このように，郁達夫本人は，出発の情景は描いていない。おそらく，伝記の別れの光景は，様々な状況を考え合わせて創作されたのであろう。しかし，息子夫婦の様子を見て，母の胸中に「気の利かない嫁」という不満がよぎったこともあったかもしれない。

孫荃が姑のつらい仕打ちから逃れられる道は，富陽を遠く離れて暮らしている夫郁達夫の下へ行くことであった。

それでは，孫荃が郁達夫と結婚してから，一緒に暮らした期間はどれくらいあったのであろうか。達夫は，後に，求愛中の王映霞への手紙の中で，「結婚してから現在まで丸6年経ちますが，私と彼女が同居した期間は，全部足しても半年にも満たないものです」[42]と述べている。「半年足らず」というのは，求愛中ゆえに誇張して表現したものと思われるが，確かに実際の同居期間もさほど長くはないようである。

年譜[43]で確認できるのは，1922年9月初めに安慶法政専科学校に赴任してから1923年2月初めに辞職して上海に戻るまでの5ヶ月間。その後，孫荃と安慶で生まれた龍児は達夫に見送られて富陽に帰り，郁達夫は一人で北京の長兄宅に行ったとなっているが，その日付は記されていないので，孫荃の上海滞在期間ははっきりしない。しかし，2月17日の『魯迅日記』に，郁達夫と会ったことが記載されており，孫荃の帰郷はそれよりも前，従ってどんなに長くても数日だったと考えられる。

次に，同年4月3日祖母の一連の葬儀を終えて，家族で上海に行って泰東図書局編集所に住み，4月6日清明節の日に孫荃と龍児は富陽に帰っている。ちなみに先の郁母が郭沫若を叱責したというエピソードは，郭沫若が日本から帰国したのが4月2日であることから，恐らくこのときの上海生活の一齣であろう。いずれにしても年譜通りであれば，前後2回の上海生活は余りにも短く，ほとんど旅行程度のものに過ぎない。

最後は，1925年4月中旬に北京に出てきてから，1927年郁達夫が王映霞と上海で家庭を持ったと知って，富陽に引き上げるまでの間であるが，その頃には郁達夫はすでに北京を離れ，武昌，上海，広州と各地を転々としていた。比較的まとまった郁達夫の在京期間は，25年5月に妻子に会いに武昌から帰京して，夏期休暇を家族と過ごし，9月末に武昌へ戻るまでの約4ヶ月と，26年6月19日に長男龍児危篤の報を受けて広州から帰京，10月初めに広州に戻るまでの3ヶ月余りである。これに，祖母の逝去の前後に富陽の家族と過ごした約1ヶ月と，その他折々の短期間の帰宅を合わせても，1年半位にしかならないのではないだろうか。

20歳で嫁いで82歳で亡くなるまでの長い生涯の大部分を，孫荃は夫のいない郁家で過ごしたことになる。特に，王映霞の出現によって家族関係が新たな展開を迎えるまでは，孫荃と姑との間に確執があり，婚家での生活が必ずしも順調なものではなかったことが確認できた。

さて，郁達夫が孫荃との結婚に強い抵抗を感じながら，母への孝心からやむなく受け入れたことは，すでに婚約・結婚それぞれの経緯の中で触れてきた。ここからは，結婚後郁達夫が孫荃に対してどのような感情を抱いていたか，家庭を持つ，家族を養うということをどのように感じていたかを見ていきたい。

結婚後の郁達夫が直面した最も大きな障害は，生計問題であった。結婚を遅らせようとしたのも，その理由のひとつが，学生の身分では妻を養えない，という不安であったことは，すでに述べた。それでも留学中は，心苦しいながらも妻の扶養を母や北京の長兄に頼ることはできた。日本にいる達夫も，官費の支給と長兄からの仕送りで何とか暮らしていけた。しかし，

1922年夏，10年間の留学生活に終止符を打ち，祖国の土を踏んだ途端，この生計問題が眼前に迫ってきたのである。

『蔦蘿行』は，何カ所かの求職にも失敗して自殺まで試みようとした「私」が，その責任はどこにあるのか，誰にあるのか，とその窮状の根本を妻に訴えている。

> 私は，この責任を私に押しつけるべきではないと思う。第一に，私たちの国家社会が，私を彼らのために働かせてくれず，気力はあるのにそれを金に換えて私自身とおまえを養えるようにしてくれない。従って現代の社会がこの責任をとるべきである。一歩譲って言っても，第二に，おまえの両親がおまえを教育して，おまえが自活できるようにしなかった。それはすなわちおまえの両親のせいだから，おまえの両親もこの責任を負うべきである。第三に，私の母親や親戚が，私におまえを養う能力がないことを知りながら，無理矢理私に結婚を勧めたのだから，彼らもこの責任を負わねばならない。[44]

『蔦蘿行』は小説である以上，若干の虚構，脚色が施されていることは否めない。しかし，「私」の境遇や考え，心情には，ほぼ作者郁達夫のそれが反映されていると考えて差し支えないであろう。

彼の怒りの矛先は，まず国家社会へ向かっている。目下のあらゆる苦しみの大本は，家庭経済の不如意であり，それはこの社会が彼に就職の機会を与えてくれないからである。そこには，外国の学士まで修めながら，社会に容れられない不遇感がにじみ出ている。怒りはさらに妻（の両親）へ，母へと向かう。「私」はA地の学校に勤めていたとき，外で嫌な目に遭うたびに妻に罵声を浴びせて鬱憤を晴らしており，失業したときの苦しい状況を思ったときには，「私一人なら，どこへも行かなくていいんだ。何をわざわざこんなひどいところで辛い仕事をするものか」と暴言を吐いている。苦痛でたまらない教師の仕事だが，妻子を養うためには辞めることもためらわれる。自由を奪われ，人のために不本意な生き方にも忍従しなければならない束縛感。妻が，「か弱く哀れな羊のような」女，夫以外に頼るすべのない女であったから，その負担感がずっしりと重くのしかかっていたのであろう。妻が自立した女であったなら，自分がこんな苦労をしなくて済んだのにと，ときには妻を恨めしく思い，そのような育て方をした両親を責める気持ちになったのであろう。そして，元をたどれば，そもそも経済力もない息子にこのような結婚を押しつけた母が悪いのだと，さらに責任を転嫁してみる。

母の期待に背き，定職も定収入もなく，妻子を年老いた母に養ってもらわなければならないことを不甲斐なく思うと同時に，そんな心境を理解できず，妻にむごい仕打ちをする母には反発も感じる。自分のせいで母の虐待を受ける妻は，不憫で可哀想で救ってやりたいと思うが，同居すると，妻は今度は自分の鬱憤のはけ口となってしまう。そのことが，また，彼を自己嫌悪に陥らせる。しかし，「私」をこのような状態に追い込んでいるものは何か？このほとんど堂々めぐりの思考こそが，「私」＝郁達夫の複雑で矛盾に満ちた心情の表れだと言えよう。母・郁達夫・孫荃，三者三様の苦しみが，それぞれ連鎖し合い，衝突し合って，さらなる葛藤が生まれるのである。

経済の逼迫が，３人の間にどのような悲しい局面をもたらしたか。散文『給沫若』[45]には，北京から帰郷したときの出来事が記されている。

私と母が楽しく談笑していると，妻が３歳の龍児を抱いて出てきた。妻は，私が手にした，洋服を着た甥の写真を見て，軽く「おまえもこんなきれいな洋服を着たいかい？」と龍児に言った。「着たい，着たい」と言う龍児に，私がわざと「ないよ」と答えると，私に叱られたと思ったのか，大声で泣き出した。３人であれこれなだめすかしたが，一向に泣きやまず，普段とてもかわいがっている母が，そのうちに腹を立ててこう言った。「おまえは本当に聞き分けのない子だね。洋服を着るには前世で功徳を積んでなきゃいけないんだ。泣いて買ってもらおうったってそうはいかないよ。泣きつくんならおまえの父さんに泣きつきな。わたしはおまえに洋服を作ってやる金などないよ。」私は，母親の言葉に恥ずかしさの余りカッとなって，思わず子どもの頬をひっぱたいてしまった。妻は涙を流しながら，狂ったように泣き叫ぶ龍児を抱きかかえて，「いい子だから泣かないで。母さんが悪かった，母さんがあんなことを言わなかったら…」となだめていた。龍児が寝静まっても，妻と私の心のわだかまりは溶けず，その騒ぎで目を覚ました龍児に薬を塗ってやりながら，私は心の中で「泣くのはおよし。結局父さんが悪いんだ，金を稼ぐ能力がなくておまえに洋服を作ってやることもできないんだ」と懇願していた。それから３日後，上海の書店から，小説の掲載が中止になった知らせが届き，子どもの洋服代も妻子の生活費もふいになり，北京や上海に行く旅費もなくなってしまった。翌日，妻の服や装身具を質に入れて百余元を作り，上海に逃亡した。港に見送りに来た妻も龍児も泣いていた。

妻の何気ない一言が引き起こした風波であったが，息子への潜在的な不満が一挙に噴出した母親と，最も敏感で痛いところを衝かれた郁達夫の傷心，身を挺して龍児をかばいながら，姑と郁達夫の間で為す術なく耐える孫荃。この出来事は，３人の人間関係と心の機微，とりわけ郁達夫の複雑微妙な感情の揺れを見事に表していると思われる。

白水紀子氏は，先に引いた小説『蔦蘿行』を，家父

長制下の母の権力という視点から検討し，次のように述べている。「おそらくこの作品も，社会からも母からも認められない惨めな『僕』の姿，妻に八つ当たりしてしまう情けない『僕』の姿を描こうとしたものだったのだろうが，結果的には郁の意に反して，母の抑圧的側面と主人公である『僕』の女性抑圧行為をも描いてしまい，夫と姑から二重の苦しみを味あわされ，黙々と自己犠牲の生を生きた妻の不幸がひときわ強く読者に伝わってくる。」[46]確かにこうした見方も成り立つであろう。

郁達夫にとって，孫荃はどのような存在であったのか。『蔦蘿行』で，「私」は妻のことを「愛せないが，愛さざるを得ない妻」[47]と呼んでいる。これはまさしく，郁達夫が孫荃に抱いていた偽らざる感情であろう。散文『還郷記』（1923年）にも，「私は愛せない妻と育てられない息子を持つ無能力者だ」[48]という一節がある。「愛せない」とは，新思想に目覚めた郁達夫が理想とする女性ではなく，母親に与えられた古い型の女性であること，従って，男女間の愛情，恋愛感情を持てないということであろう。「愛さざるを得ない」とは，妻として迎えた以上道義的にも夫として愛さなければならない，或いは，自分が愛し守らなければならない，か弱い女性だ，ということであろうか。

少なくとも，郁達夫にとって孫荃は，無関心でいられる，無視できる，拒絶できるような存在ではなかった。元気や勇気を与えて苦痛を忘れさせてくれるような存在でもなかったが，悲しみや痛みを共有し，慰め合える伴侶ではあったはずである。2人の間を結ぶ絆，それはいわば運命共同体的な連帯感といったものであったろうか。事実，2人は，二男二女（長男龍児は夭折）にも恵まれた。

だが，このような確かな絆があったが故に，郁達夫に王映霞との新たな運命的出会いが訪れたとき，その葛藤は一層激しいものとなったのである。

（待続）

注

1　杭州出身で，父親が王映霞の祖父の友人である。郁達夫とは日本留学時代に交友を結び，東京高等師範に学ぶ。帰国後，省立温州十中高中部で教鞭を執る。そのとき附属小学校に赴任してきた王映霞と知り合う。

2　『漢語大詞典』第1巻，560頁。

3　孫百剛『郁達夫外伝』浙江人民出版社，1982年，36頁。

4　王映霞の手記や自伝で単行本になったものとして，例えば時代順に以下のようなものがある。①『郁達夫婚変前後』広角鏡出版社，1983年　②『王映霞自伝』伝記文学出版社，1990年　③『我与郁達夫』広西教育出版社，1992年　④『郁達夫与王映霞』花山文芸出版社，1993年　⑤『王映霞自伝』江蘇文芸出版社，1996年。

ちなみに，③④には王映霞の「半生雑憶」が収められており，②⑤の「王映霞自伝」は「半生雑憶」の記述に加筆修正した内容である。

5　本書については，鈴木正夫氏「郁達夫の最初の妻・孫荃」（『けんぶん』17，1995年3月）によって，短文ながら行き届いた紹介がなされている。

6　郁達夫と孫荃の婚約時期について，袁慶豊『欲将沈醉換悲涼—郁達夫』（上海文芸出版社，1998年）は，複数の説があることを指摘し，それらの根拠となっている郁達夫の文章や手紙等を検討して，正式に書き付けを取り交わして婚約したのが1917年であると結論づけている。（156～159頁）

『郁達夫及其家族女性』でも著者蔣増福や，孫荃のことを最もよく知る家族の一人である長女郁黎民が婚約を1917年としており，この時期は間違いないと思われる。

7　「才女・賢妻・良母—郁達夫原配夫人孫荃」（『郁達夫及其家族女性』145～153頁）

8　富春江の南岸，富陽城内から15㎞のところにある。

9　許鳳才『浪漫才子郁達夫』（河南人民出版社，1989年）は，孫荃の父親は郁家が没落していて家格が釣り合わないと乗り気でなかったが，才気と遠大な志のある学問好きの男性を理想としていた孫荃が二つ返事で同意した，としている。（22～25頁）

10　中国広播電視出版社，2004年。上冊，379～380頁。

11　郁達夫の母親陸氏と，当時まだ存命であった祖母戴氏。どちらも夫を早くに亡くした寡婦であった。

12　注7所掲書，149頁。

13　『郁達夫文集』第9巻，生活・読書・新知三聯書店香港分店，花城出版社，1982年，322頁。

14　張潔宇・張恩和『風雨情囚—郁達夫的女性世界』河南人民出版社，2003年，27頁。原文は“親友”

15　陳福亮『風雨茅蘆—郁達夫大伝』上冊，240頁。

16　注14所掲書，30頁。

17　『中国女性の20世紀—近現代家父長制研究』明石書店，2001年，66頁。

18　「『婦女雑誌』からみる自由離婚の思想とその実践—ジェンダー論の視点から」（村田雄二郎編『『婦女雑誌』からみる近代中国女性』研文出版，2005年所収）304頁，注（84）。

19　『東方雑誌』第18巻第4～6号（1921年）。引用は，中山義弘訳「五四運動期における学生の婚姻意識調査—陳鶴琴『学生婚姻問題之研究』の翻訳」『北九州大学外国語学部紀要』46号・47号・48号（1982年3月・9月・10月）。

20　上冊，295頁。

21　上冊，296頁。

22　注19所掲書。

23　周艾文・于聽編訂『郁達夫詩詞抄』浙江人民出版社，1981年，96頁，【編者按】。

24　福建人民出版社，1984年，39頁。

25　注9所掲書は，少し異なった解釈をしている。「二人の熱い愛情が猛烈な勢いで発展して，3年経たない内にしっかりと結びつき，結婚しないではいられない程になった，そこで1920年の夏休みに彼らは正式に結婚した。」しかし，彼らは現代青年なので，婚礼は当時としては大変斬新なものであったが，「双方とも精神的には充分満足していた」。（112頁）

2人の情愛が深まったことは交わされた手紙の多さや内容からも窺われるが，少なくとも郁達夫が積極的に結婚を望んだとは考えられない。また，時代や地域，家柄を考えると，まともな結婚儀式を行わないことに孫荃が傷つかないはずはない。同書は，孫荃を実際よりも進歩的な女性として描いているように思われる。

26　上冊，301頁。

27　上冊，302頁。

28　『郁達夫及其家族女性』124頁。

29　注28所掲書，125頁。
30　「我的母親」『郁達夫及其家族女性』136頁。
31　注28所掲書，140頁。
32　郁雲『郁達夫伝』187頁。
33　上冊，378頁。
34　『郁達夫文集』第1巻，生活・読書・新知三聯書店香港分店，花城出版社，1982年。
35　『郁達夫文集』第3巻，140頁。
36　郁風『我的故郷』百花文芸出版社，1984年，150頁。
37　上冊，378頁。
38　桑逢康『感傷的行旅—郁達夫伝』北岳文芸出版社，1991年版，54頁。

袁慶豊『欲将沈醉換悲涼—郁達夫』も，姑の孫荃に対する不満の根源について，この描写を取りあげている。そして，郁達夫は具体的には示していないとして，事実関係には言及していないが，嫁姑関係の緊張は相当以前からあったものだと考えている。(293頁)

郁達夫の伝記である注14所掲書『風雨情囚—郁達夫的女性世界』にも，同様の情景がほとんど文字の異同もなく載っている。(40頁) これは，出版された時期から考えて，桑逢康の解釈を『風雨情囚—郁達夫的女性世界』が踏襲したものであろう。

39　注7所掲書，147頁。
40　注34所掲書，215頁。
41　同上
42　1927年1月9日の書簡。王観泉編『達夫書簡—致王映霞』天津人民出版社，1982年，22頁。
43　郭文友『千秋飲恨—郁達夫年譜長編』四川人民出版社，1996年。
44　注34所掲書，218頁。
45　『郁達夫文集』第3巻，100～106頁。
46　注17所掲書，70頁。
47　注34所掲書，213頁。
48　注35所掲書，31～32頁。

(平成17年9月16日受理)